

## 『淮南萬畢術』訳注（一）

有馬 卓也

### 【はじめに】

『淮南萬畢術』（以下『萬畢術』と略記）は前漢の文帝期から武帝期にかけて生きた淮南王劉安が、全国から学者や方士たちを招致して製作した著作の一つとされている。しかし、『漢書』芸文志には本書は掲載されていない。ちなみに淮南王国で書かれた書物の中で、『漢書』芸文志に記載があるのは以下の通りである。

- 『淮南道訓』二篇（六芸略・易）
- 『淮南内』二十一篇（諸子略・雜家）
- 『淮南外』三十三篇（諸子略・雜家）
- 『淮南王賦』八十二篇（詩賦略・屈賦）
- 『淮南王群臣賦』四十四篇（詩賦略・屈賦）
- 『淮南歌詩』四篇（詩賦略・歌詩）
- 『淮南雜子星』十九卷（數術略・天文）

また『漢書』劉安伝には、『内書』二十一篇・『外書』・『中書』八篇の三種が挙げられている（『史記』劉安伝には著作の記載が一切ない）が、このうち『中書』八篇が芸文志には見られない。ただし『史記』龜策列伝において、増補者の褚少孫が『萬畢』の「石朱方」に言及しているし、『漢書』劉向伝には次のような『枕中鴻宝苑秘書』という一書にまつわるエピソードが記されている。

上（宣帝）復た神仙方術の事を興す。而して淮南に『枕中鴻宝苑秘書』あり。書は神仙の鬼物を使ひて金を為るの術、及び鄒衍の道を重んじて命を延ばすの方を言ふ。世人の見るものなし。而るに更生（向）の父徳は武帝の時に淮南の獄を治め其の書を得。更生、幼くして読誦し、以て奇と為す。之を獻じて、黄金成すべしと言ふ。上、尚方鑄作の事を典つかどらしむ。費甚だ多きも、方、驗あらず。上、乃ち更生を吏に下す。吏、更生、偽黄金を鑄すと効し、死に当たると繋ぐ。更生の兄陽城侯安民上書し、国戸の半を入れ、更生の罪を贖ふ。上も亦其の材を奇とし、

冬を踰えて死を減じて論を得。(『漢書』劉向伝)

ここに『枕中鴻宝苑秘書』という書が記され、それが「神仙の鬼物を使ひて金を為るの術」「鄒衍の道を重んじて命を延ばすの方」といった内容を持つものとして書かれている。

さらに『神仙伝』劉安には、

『中篇』八章は神仙・黄白の事を言ふ、名づけて『鴻宝』と為す。『萬畢』三章は変化の道を論ず。

と記されている。『萬畢術』が目録に記されるのは『隋書』経籍志が初出であり、『淮南萬畢経』と『淮南变化術』とが各一卷として子部・五行に記載されている。ここで『萬畢術』に関連する著作をまとめると以下ようになる。

- 『枕中鴻宝苑秘書』…『漢書』劉安伝・『神仙伝』劉安
- 『萬畢術』石朱方…『史記』龜策列伝
- 『萬畢』三章…『神仙伝』劉安
- 『淮南萬畢経』一卷…『隋書』経籍志
- 『淮南变化術』一卷…『隋書』経籍志
- 『淮南王萬畢術』一卷…『旧唐書』芸文志・『新唐書』経籍志

以上については胡適『淮南王書』(远流出版公司『胡适作品集22』所収、1986)・金谷治『老荘的世界—淮南子の思想』(平楽寺書店、1959)。

後に『淮南子の思想』講談社学術文庫、1992)・楠山春樹「淮南中篇と淮南萬畢」(秋月観暎『道教と宗教文化』(平河出版社、1987))。後に楠山春樹『道家思想と道教』(平河出版社、1992))の中でも詳細に論じられており、三氏ともに『萬畢術』を神仙・黄白の事を記した『中書』を源としたものと結論づけている。これに対し、王利器氏は『風俗通義校注』(中華書局、1981)正失篇の「淮南王安神仙」の注の中で以下のように述べている。

器案ずるに、『史記』龜策列伝に「褚先生曰く「臣、郎たりし時、『萬畢』石朱方を見る。伝に曰く「神龜あり、江南の嘉林の中に在り」と」と。『索隱』に「按ずるに『萬畢術』の中に「石朱方」あり。方に「嘉林中」を説くに中るが故に「伝に曰く」と云ふ」と。此れ『萬畢術』の最も早く漢人の著作中に見ゆる者たり。『拾遺記』蕭綺録に曰く「淮南子」に云ふ「電を呑み火を吐くの術は、萬畢の家より出づ」と。此より以後、著録に見ゆる者は、『隋』志に『淮南萬畢経』『淮南变化術』二書あり。而『唐』志は『淮南萬畢術』はあるも、『苑秘書』は俄に空く。窃ひそかに疑ふらくは『萬畢術』は即ち『苑秘書』ならん。苑秘とは其の神秘の苑囿たるを言ひ、萬畢とは其の万有の網羅たるを言ふ。義を為すに既に同じ。音も亦相近きなり」と。

ここでは『萬畢術』が『苑秘書』と同じものであろうと論じている。

さて、『萬畢術』は『唐書』に『淮南王萬畢術』一卷が記されて以

降、目録から姿を消してしまふ。『唐書』記載の『萬畢術』一卷について、楠山春樹氏はその内容を検討した上で、『隋書』の『淮南萬畢経』『淮南变化術』各一卷」という記述の『萬畢経』一卷が本文、『变化術』一卷がその注、そして『神仙伝』劉安伝にある『萬畢』三巻は变化の道を論ずるの三巻本と両『唐書』にある『淮南王萬畢術』一卷本は両書の合本ではないかと推定しておられる。『萬畢術』に既に注がついていたことは、各種類書を見れば明らかであり、楠山氏の指摘は肯首し得る。

また内容面から、楠山氏は『萬畢術』の葉德輝による集本の序の「萬とは盈なり。畢とは尽なり。万物の理、尽く此に具はる」という文を示して、本書が「万象の生じ变化する理を察し、万象をおのが意のままに操る術、それが萬畢術の意味なのであろう」という意図の著作と位置づける。さらにそこに語られる変化について、氏は神仙的（仙道的）なものが多いと、民間のまじないに類するものの、呪術的なものが多いとし、「その中心をなしているのは同類相感の理にもとづく一種の呪術である」「それは、特別な修行を積んだり、特殊な生活環境の中にある方士の行う術というよりも、むしろ日常生活にも密着して民間に行われていたおまじないの類である」と述べておられる。事実、その内容は科学的なものから、医学・薬学・風習・伝承・禁忌・呪術等にいたるまで、非常に多岐にわたっている。

さて、亡佚した『萬畢術』は、その後、『太平御覽』『芸文類聚』『初学記』などの類書に引用されたものや、数例ながら『本草綱目』『芥民要術』『開元占経』その他に引用されたものを集める作業が行

われた。代表的な集本として以下の三書を挙げることができる。

- 『問経堂叢書』所収の孫馮翼本（七九条）（叢書集成初編所収）
- 『十種古佚書』所収の茆泮林本（一〇三条：本編九五条・補遺三条）
- ・再補遺五条（叢書集成初編所収）
- 『観古堂所著書』所収の葉德輝本（一一六条）（叢書集成統編所収）

本訳注は叢書集成統編に収められた『観古堂所著書』所収の葉德輝本を底本として使用し、他の二書もあわせて参照した。

#### 【凡例】

- 一、テキストには『観古堂所著書』所収の葉德輝本を使用した。
- 一、訳注は「原文」「書き下し」「注」「現代語訳」「補」の順に記載した。
- 一、「原文」においては、原則としてテキストのままの字体を示した。「書き下し」以降は新字で表記した。また注は二文字分さげて表記した。文・注ともに（ ）内は葉德輝の注である。
- 一、「書き下し」においては、（文）と（注）を冠して表記した。また葉德輝の注は・印を冠して表記した。
- 一、「補」においては、各典拠の原文を○印を冠して示すとともに、各条の別解、位置づけ、孫馮翼本・茆泮林本独自の注解等について、◇印を冠して言及した。

## 【訳注】

## 淮南萬畢術序

## 【原文】

淮南萬畢術、漢淮南王劉安纂也。謂之萬畢者、萬盈數也、畢盡也。言萬物之理盡具于此也。漢書藝文志子雜家、淮南内二十一篇・淮南外三十三篇、不云有萬畢術。史記龜策傳、褚先生曰、臣爲郎時、見萬畢石朱方。萬畢之名、始見于此。葛洪神仙傳曰、漢淮南王篤好儒術、兼占侯方術。作内書二十二篇。又中篇八章、言神仙黃白之事。名爲鴻寶。萬畢三章、論變化之道。凡十萬言。隋書經籍志云、梁有淮南萬畢經・淮南變化術、各一卷。新旧唐志五行家、祇載淮南萬畢術一卷。馬總意林同。知唐時卽已合并矣。

## 【書き下し】

『淮南萬畢術』は漢の淮南王劉安の纂するなり。之を「萬畢」と謂ふは、「萬」は盈數なり、「畢」は尽くすなり。万物の理の尽く此に具はるを言ふなり。『漢書』芸文志の子・雜家に『淮南内』二十一篇・『淮南外』三十三篇あるも、『萬畢術』あるを云はず①。『史記』龜策伝に「褚先生曰く、臣郎たりし時、『萬畢』石朱方を見る」と②。『萬畢』の名、始めて此に見ゆ。葛洪『神仙伝』に曰く「漢の淮南王は篤く儒術を好み、占侯・方術を兼ね。『内書』二十二編を作る。又『中篇』八章ありて、神仙・黃白の事を言ふ。名づけて『鴻

寶』と爲す。『萬畢』三章は變化の道を論ず。凡そ十萬言」と③。『隋書』經籍志に云ふ「梁に『淮南萬畢經』『淮南變化術』各の一巻あり」と④。『新旧唐』志の五行家には祇だ『淮南萬畢術』一巻を載するのみ⑤。馬總『意林』同じ⑥。唐の時に即ち已に合并するを知る⑦。

## 【注】

- ① 『漢書』芸文志・諸子略・雜家に『淮南内』二十一篇（王安）「『淮南外』三十三篇（師固曰く、内篇は道を論じ、外篇は雜説）」とある。また數術略・五行に『淮南萬畢術』に相当するような著作は見られない。
- ② 『史記』龜策伝に「褚先生」曰く、臣郎たりし時、『萬畢』石朱方を見る」とある。以下「伝に曰く……」として石朱方について記す。葉德輝本（以下「葉本」と略記）の七二条。
- ③ 『神仙伝』（『太平廣記』卷八所引）に「漢の淮南王劉安は）篤く儒学を好み、占侯・方術を兼ね。士を養ふこと數千人。皆天下の俊士なり。『内書』二十二篇を作る。又『中篇』八章あり。神仙・黃白の事を言ふ。名づけて『鴻寶』と爲す。『萬畢』三章は變化の道を論ず。凡そ十萬言」とある。
- ④ 『隋書』經籍志・子部・五行に「梁に又あり」として『淮南萬畢經』『淮南變化術』各一巻の記述が見える。
- ⑤ 『旧唐書』經籍志・『新唐書』芸文志ともに子部・五行に『淮南萬畢術』一巻とある。
- ⑥ 唐の馬聰編。周・秦以降の諸家の文を雜記的に集めたもの。

現行本には見られない佚文を多く引いている。『淮南萬畢術』については巻六に『淮南萬畢術』一卷として四条が引いてある。

⑦ 葉德輝序は改行なしのまとまりだが、本訳注では便宜上、序文を四分節した。

### 〔現代語訳〕

『淮南萬畢術』は漢の淮南王劉安が編纂した書である。書名に「萬畢」というのは、「萬」は満ちた数を意味し、「畢」は尽くすという意味である。つまり本書は万物の理<sup>ことわり</sup>をすべて備えたものであることを言っている。『漢書』芸文志の諸子略の雑家に、『淮南内』二十一篇と『淮南外』三十三篇は見えるが、『萬畢術』は記されていない。しかし『史記』龜策伝には「褚先生曰く、私が郎であった時、『萬畢』石朱方を見た」とある。『萬畢』の名が初めて記録されている部分である。また葛洪の『神仙伝』には「漢の淮南王は非常に学問を好み、占侯・方術なども併せて身につけていた。そして『内書』二十二編を作った。また『中篇』八章という著作もあって、ここでは神仙・黄白の事を記している。これを『鴻寶』という。『萬畢』三章は変化の道を論じたものである」とある。『隋書』経籍志の子部・五行には「梁に『淮南萬畢経』『淮南变化術』各おの一卷あり」とある。しかし『新唐書』芸文志と『旧唐書』経籍志の子部・五行家には『淮南萬畢術』一卷とあるのみである。馬總の『意林』も同じである。唐の時には両書が合併して一卷となっていたことがわかる。

### 〔原文〕

萬畢術、雖不見于漢志、然兩漢諸儒恒多稱引。董子春秋繁露言、慈石取鐵、眞金取火。班固郊祀志言、方士小方闢菑、某自相擊觸。許慎說文解字言、青蚘還錢、磁諸取水。鄭氏周禮注言、陽錄取火、鑿鏡取水、莽草薰蟲、牡鞠燒灰、去蠹黽。皆足證萬畢術傳授之古。至高誘鴻烈解、解經取證尤多。則是書固久爲漢人所推重矣。史稱淮南王叛逆不道而其文學固不可掩。初學記引劉向別錄云、淮南王聘善易者九人、從之採獲。故書中署曰淮南九師書。漢志易家有淮南道訓二篇。是淮南于易家爲老師。其占候之學亦先于京孟易。于六藝爲通陰陽之書。儒家道其常、諸子則窮其變。噬嗑之噬肉得金、既濟之曳輪濡尾、睽之載鬼張弧、妬之以杞包瓜、九師書中必有一篇潭輿之義。惜乎、其不傳也。

### 〔書き下し〕

『萬畢術』は『漢』志に見えずと雖も、然れども兩漢の諸儒恒に称引すること多し。董子『春秋繁露』に「磁石は鉄を取る」「眞金は火を取る」と言ひ①、班固郊祀志に「方士の小方に某を闢はずに、某自ら相撃ち触る」と言ひ②、許慎『說文解字』に「青蚘は錢を還す」「磁諸は水を取る」と言ひ③、鄭氏『周礼』注に「陽錄は火を取る」「鑿鏡は水を取る」「莽草は虫を薰す」「牡鞠の焼灰は、蠹黽を去る」と言ふ④は、皆『萬畢術』の伝授の古きを証するに足る。高誘の『鴻烈解』に至りては、經を解する証を取るもの尤も多し。則ち是の書は固より久しく漢人の推重する所たり。『史』は淮南王を叛逆不道と称するも⑤、其の文学は固に掩ふべからず。『初学

『記』は劉向『別録』を引きて云ふ「淮南王は『易』を善くする者九人を聘し、之に従ひて採獲す。故に書中に署して『淮南九師書』と曰ふ(⑥)と。『漢』志の易家に『淮南道訓』二篇あり。是れ淮南は『易』家に于て老師たり。其の占候の学も亦京孟(⑦)の『易』に先んじ、六芸に于て陰陽に通づるの書を為す。儒家は其の常を道ふも、諸子は則ち其の変を窮む。噬嗑の「肉を噬みて金を得(⑧)」、既済の「輪を曳き尾を濡らす(⑨)」、睽の「鬼を載せて弧を張る(⑩)」、妬の「杞を以て瓜を包む(⑪)」は、『九師書』中に必ず一篇の潭奥の義あらん。惜しいかな、其れ伝はらず。

〔注〕

- ① 『春秋繁露』郊語第六五に「人之言、妓去烟、鴟羽去昧、慈石取鉄、頸金取火、蠶珥絲於室、而絃絶于堂、禾実于野、而粟缺于倉、蕪夷生于燕、橘积死于荆。此十物者、皆奇而可怪、非人所意也。夫非人所意、而然既已有之矣。」とある。「慈石取鉄」は葉本の二四・二五に、「頸金取火」は現『萬畢術』には見られないが、葉本の四に対応する。
- ② 『漢書』郊祀志上に「於是上使驗小方、闢菑。菑自相触擊。」とある。『史記』封禪書では索隱が『萬畢術』を引いて解説している。葉本の二五。
- ③ 『說文解字』蚘(卷一三上)に「青蚘、水虫。可還錢。從虫夫声。」とある。葉本の六〇。また鑑(卷一四上)に「大盆也。從金監声。一曰鑑諸。可以取明水於月。」とある。葉本の四。
- ④ 『周礼』春官・菑氏・鄭玄注に「(杜子春云)以陽燧取火於日」

- とあり、秋官・司烜氏に「司烜氏掌以夫遂取明火於日、以鑿取明水於月、……」とあって、その鄭玄注に「夫遂陽遂也。鑿鏡属。取水者、世謂之方諸取日之火月之水、欲得陰陽之潔氣也」とあり、秋官・剪氏に「以莽草熏之」とあって、その鄭玄注に「莽草、薬物殺虫者、以熏之則死」とあり、秋官・蠲氏に「蠲氏掌去鼃黽焚牡鞠以灰洒之則死」とあって、その鄭玄注に「牡鞠、鞠不華者。齐鲁之間、謂鼃為蠲。鼃、耿鼃也。蠲與耿鼃、尤怒鳴。為聒人耳去之」とある。葉本の四・一〇七。
- ⑤ 『史記』劉安伝の贊に「専ら邪僻の計を挟み、謀りて畔逆を為す」とある。
- ⑥ 『初学記』卷二に「劉向『別録』曰「所校讐中易伝、淮南九師道訓、除復重定著十二篇。淮南王聘善為『易』者九人、從之採獲。故中書署曰『淮南九師書』。」とある。或いは『淮南九師書』は『中書』の一部か。
- ⑦ 宣帝期に博士となった孟喜と元帝期に博士となった京房とをさす。
- ⑧ 『易』噬嗑の六五に「噬乾肉得黄金」とある。
- ⑨ 『易』既済の初九に「曳其輪、濡其尾」とある。
- ⑩ 『易』睽の上九に「見豕負塗、載鬼一車、先張之弧、後説之壺」とある。
- ⑪ 『易』妬の九五に「以杞包瓜」とある。

〔現代語訳〕

『萬畢術』は『漢書』芸文志には見えないが、前漢・後漢の儒学

者たちは本書を引き合いに出すことが多い。董仲舒は『春秋繁露』において「磁石は鉄を取る」「真金は火を取る」と言い、班固は『漢書』郊祀志において「方士の小方に碁を闘はすに、碁自ら相撃ち触る」と言い、許慎は『説文解字』において「青蚨は錢を還す」「磁石は水を取る」と言い、鄭玄は『周礼』の注において「陽錄は火を取る」「鑿鏡は水を取る」「莽草は虫を薰す」「牡鞠の焼灰は、繩毬を去る」と言っている。これらはすべて『萬畢術』の伝承の古さを証明するものである。また高誘の『淮南鴻烈解』においては、『淮南子』を解釈する傍証として『萬畢術』を使用している例が最も多い。つまり本書は漢代の学者たちが長きにわたって重んじたものだったのである。司馬遷は『史記』の中で淮南王劉安を叛逆不道と称したけれども、その学識は覆い隠すことはできない。『初学記』が劉向『別録』を引いて「淮南王は『易』を得意とする者九人を招聘し、彼らに易の諸説を採録させた。そして『淮南九師書』と名づけた」と記している。『漢書』芸文志の易家に『淮南道訓』二篇とある。つまり淮南は『易』学のリーダーでもあった。易における占候の学についても京房や孟喜に先んじており、所謂六芸における陰陽の学に通ずる著作を為していたのである。儒家の学は変化のない恒常的なものについて言うが、諸子の学は変化するものについてそのその様を極めようとするたとえば『易』噬嗑の卦の「肉を噬みて金を得」、既済の卦の「輪を曳き尾を濡らす」、睽の卦の「鬼を載せて弧を張る」、姤の卦の「杞を以て瓜を包む」といった爻辞について、『淮南九師書』でも必ず奥深い説明が為されていたに違いない。現在その書が伝わっていないのは残念である。

## 〔原文〕

今萬畢術中有可攷驗者。如置鏡高懸以照四隣、泰西折光鏡・回光鏡即其遺製。鸚鵡斷舌使語、今湘中人家蓄之、于五月五日或七月七日、剔去舌尖。不久自語。鴉鵂致鳥、即今獵戸之鳥媒。削冰取火、即今之火鏡。慈石提碁、即今之吸鐵石。其餘各方、均不外五行生剋之理。無他異也。迂儒不達、乃詆爲方術之書。不亦陋乎。

## 〔書き下し〕

今『萬畢術』中に攷驗すべき者あり。「鏡を置きて高く懸けて以て四隣を照らす①」の如きは、泰西の折光鏡・回光鏡②にして、即ち其の遺製なり。「鸚鵡は舌を断ちて語らしむ③」は、今湘中の人家は之を蓄ひて五月五日或いは七月七日に于て舌の尖を剔き去る④。久しからずして自ら語る。「鴉鵂は鳥を致す⑤」は、即ち今の獵戸の鳥媒なり。「氷を削りて火を取る⑥」は、即ち今の火鏡なり。「慈石は碁を提く⑦」は、即ち今の吸鐵石なり。其の余の各方も、均しく五行生剋の理に外れず。他異なきなり。迂儒は達せずして、乃ち詆りて方術の書と為す。亦陋ならずや。

## 〔注〕

- ① 葉本の二三。
- ② 折光鏡はプリズムのようなものをさすか。詳細は不明。回光鏡は、ひる鏡。光線が射入してから回転するもの。
- ③ 葉本の三二。
- ④ 『荆楚歲時記』五月に「鸚鵡を捕ふ」として「此の月、鸚鵡の

子、毛羽新たに成る。俗、好んで巢に登り、取りて之を養ふ。  
必ず先づ舌の尖を剪り去り、以て其に語を教う。」とある。

⑤ 葉本の三六。

⑥ 葉本の九六。

⑦ 葉本の二四。

〔現代語訳〕

さて、『萬畢術』の中には実証できるものがいくつかある。たとえ  
ば、「鏡を置きて高く懸けて以て四隣を照らす」というのは、西洋の  
折光鏡や回光鏡が、その遺製である。また「鸚鵡は舌を断ちて語ら  
しむ」というのは、現在でも湘中の人家では鸚鵡（九官鳥の類）を  
飼って、五月五日或いは七月七日に、その舌の先を切り取る。する  
としばらくして言葉をしやべるようになる。さらに「トビやコノハ  
ズクは鳥を致す」というのは、まさに今の狩猟に用いる鳥媒（囿の  
鳥）であるし、「氷を削って火を取る」というのは、まさに今の虫眼  
鏡（凸レンズ）であるし、「慈石は碁を提く」というのは、まさに今  
の磁石である。『萬畢術』に見えるその他の処方も、おしなべて五行  
の相生説や相剋説の理に適ったものである。特に怪しい処方がある  
わけではない。ところが迂儒はこの理に達せず、『萬畢術』を譏って  
方術の書とみなしている。なんと陋識なことであろうか。

〔原文〕

其書宋以来亡佚、宋裴駟史記集解、魏賈思勰齊民要術、隋杜臺卿  
玉燭寶典、唐虞世南北堂書鈔、歐陽詢藝文類聚、徐堅初學記、白氏

六帖、宋本段公路北戸録、宋本馬總意林、瞿曇悉達開元占經、道世  
法苑珠琳、慧琳一切經音義、宋日本康頼醫心方、李昉太平御覽、吳  
淑事類賦、政和重修經史證類本草諸書、凡所徵引得百餘條。今輯存  
之都爲二卷。以文注全者入上卷、有文無注、或有注無文者入下卷。  
仍題淮南萬畢術。從唐志也。群書稱引、有作劉安說者、有作淮南方  
者、有作劉安方者、有作淮南子而今淮南無其文者、亦有省作萬畢方  
者。皆以意屬讀、連貫成文。逐條注明出處、略加攷證。匪曰譯述。  
聊存佚亡。

世有博物之士、引而伸之、則海西格至之學、不能不引重于東來矣。  
光緒十七年歲次。辛卯冬十一月。長沙葉德輝叙。

〔書き下し〕

其の書は宋以来亡佚するも、宋の裴駟の『史記集解』、魏の賈思勰  
の『齊民要術』、隋の杜台卿の『玉燭寶典』、唐の虞世南の『北堂書  
鈔』、歐陽詢の『芸文類聚』、徐堅の『初學記』、『白氏六帖』、宋本  
の段公路の『北戸録』①、宋本の馬總の『意林』②、瞿曇悉達の  
『開元占經』、道世の『法苑珠琳』、慧琳の『一切經音義』、宋日本  
に康頼の『医心方』、李昉の『太平御覽』、吳淑の『事類賦』、『政和  
重修經史證類本草』③、諸書の凡そ徵引する所、百余条を得。今、  
之を輯存し都て二卷と爲す。文・注全き者を以て上巻に入れ、文あ  
りて注なきもの、注ありて文なき者を下巻に入る。仍りて『淮南萬  
畢術』と題す。『唐』志に従ふなり。群書は称し引きて、「劉安説」  
と作す者あり④、「淮南方」と作す者あり⑤、「劉安方」と作す者  
あり⑥、「淮南子」と作して今の『淮南』に其の文なき者あり⑦、



亦省きて「萬畢方」と作す者あり〔⑧〕。皆意を以て属読し、連貫して文を成す。條を逐ひて注に出処を明らかにし、略して攷証を加ふ。撰述と曰ふには匪ず。聊か佚亡するを存せんとするのみ。世に博物の士ありて、引きて之を伸ばせば、則ち海西格至の学も、東来を引重せざるあたはじ。

光緒十七年歲次。辛卯冬十一月。長沙の葉德輝叙す。

〔注〕

- ① 段公路の『北戸録』の宋版本については未見。
- ② 馬總撰の『意林』は五卷本だが、宋版本にのみ補刻された六卷があり、その巻六に『萬畢術』の引用が見られる。
- ③ 金の張存恵が撰した『政和新修經史証類備用本草』の重刊本であり、宋の寇宗奭の『本草衍義』が取り入れてある。
- ④ 葉本の七〇にその例が見える。『政和重修經史証類本草』巻一五（人部）にありとするが未見。
- ⑤ 葉本の六七にその例が見える。『政和重修經史証類本草』巻一七（獸部中品）。
- ⑥ 葉本の七四にその例が見える。『政和重修經史証類本草』巻六（草部上品之上）にありとするが、当該部分は「劉安」ではなく「淮南子」に作る。
- ⑦ 葉本の六五・六六・一一〇にその例が見える。それぞれ『太平御覽』八九九（獸部・牛中）・『太平御覽』九九〇（菜部・天雄）・『太平御覽』三一一（時序部・七月七日）。葉本一一〇は『太平御覽』三七に作るが誤り。

⑧ 葉本の九三・九七にその例が見える。それぞれ『政和重修經史証類本草』巻一一（草部下品之下）・『政和重修經史証類本草』巻二九（菜部下品）。

〔現代語訳〕

『萬畢術』は宋以降亡んでしまつたが劉宋の裴駟撰の『史記集解』八〇卷、北魏の賈思勰撰の『齊民要術』一〇卷、隋の杜台卿撰の『玉燭寶典』一二卷、唐の虞世南撰の『北堂書鈔』一六〇卷、唐の歐陽詢等奉勅撰の『芸文類聚』一〇〇卷、唐の徐堅等奉勅撰の『初学記』三〇卷、唐の白居易撰の『白氏六帖事類集』三〇卷、唐の段公路撰の『北戸録』三卷の宋版本、唐の馬總撰の『意林』五卷の宋版本、唐の瞿曇悉達撰の『開元占經』一二〇卷、唐の道世撰の『法苑珠林』一〇〇卷、唐の慧琳撰の『一切經音義』一〇〇卷、日本平安の丹波康頼撰の『医心方』三〇卷、宋の李昉奉勅撰の『太平御覽』一〇〇〇卷、宋の呉淑撰の『事類賦』三〇卷、金・張存恵に基づく『政和重修經史証類本草』三〇卷。これらの諸書が引用している『萬畢術』を合わせて百余条を得た。今、これらを編輯して二巻とした。『萬畢術』の本文と注とがともにそろっているものを上巻に入れ、本文だけあつて注のなきものや、注だけあつて本文のないものを下巻に入れた。そして『淮南萬畢術』と題した。『唐書』の目録に従つたものである。もととなつた諸書は「劉安説」と称するものがあつたり、「淮南方」と称するものがあつたり、「劉安方」と称するものがあつたり、「淮南子」と称しながら今の『淮南子』にその文が見えないものがあつたり、またはつきりと「萬畢方」と称するものがあつたり

する。いずれも意味内容に従ってバラバラに存在するものをつなぎ読み、連続した内容を合わせて文章にしたものである。各条ごとに  
出典が明らかになるようにし、所々に考証を加えた（注に見える「按ずるに」以下の文がそれにあたる）。撰述というほどのものではない。  
亡佚してしまった『萬畢術』を再生させようと思っただけである。

世に博物の士がいて、私の作業をさらに発展させてくれれば、西洋の物理学なども本書を含む東洋の科学を重んぜざるを得ないであろう。

光緒十七（一八九二）年歳次。辛卯冬十一月。長沙の葉德輝叙す。

淮南萬畢術卷上 漢淮南王劉安纂

賜進士出身員外郎衛吏部文選司主事加三級葉德輝輯刊

卷上

一

〔原文〕

桐木成雲。〔藝文類聚〕八十八。『太平御覽』九百五十六。又七百三十六引作、梧木成雲。）

取十石瓦甕、滿水中、置桐甕中、蓋之。三四日、氣如雲作。〔藝文類聚〕八十八。『太平御覽』九百五十六。又七百三十六引作、取梧木、置十碩瓦甕中。氣盡則出雲。『類聚』及九百五十六所引較略。凡類此者、均從其詳者錄之。）

〔書き下し〕

〔文〕 桐木、雲を成す。

・『芸文類聚』八十八。『太平御覽』九百五十六。又七百三十六は引きて「梧木、雲を成す」に作る。

〔注〕 十石〔①〕の瓦甕〔②〕を取りて、水の中に満たし、桐を甕中に置きて、之に蓋す。三四日にして、氣雲の如く作る。

・『芸文類聚』八十八。『太平御覽』九百五十六。又七百三十六は引きて「梧木を取りて十碩の瓦甕の中に置く。氣尽くれば則ち雲を出だす」と。『類聚』及び九百五十六の引く所と較略

す。凡そ此に類する者は、均しく其の詳らかなる者に従ひて之を録す。

〔注〕

① 石(一石は十斗)は瓦甕の容量の単位。一石が約一九・四リットル。十石で一九四リットル。下の十碩も同じ。

② 水や酒などを入れる口のつぼんだ土焼き製のかめ(瓶・甕)。

〔現代語訳〕

(文) 桐の木が雲をおこす。

(注) 十石の土焼き製のかめを準備して、その中に水を満たし、桐をかめの中に入れて蓋をする。三四日たつて蓋を開けると、気が雲のようにわき起こる。

〔補〕

○ 『芸文類聚』八十八(木部・桐)「淮南萬畢術曰、桐木成雲。(取十石甕、満中。三四日気水置桐蓋之、三日如雲形。)

○ 太平御覽九百五十六作、取十石瓦甕、満中水。置桐蓋之。三四日気如雲作。此有訛倒。

○ 『太平御覽』九百五十六(木部・桐)「淮南萬畢術曰、桐木成雲。(取十石瓦甕、満中水。置桐甕中蓋之。三四日気如雲作。)

○ 『太平御覽』七百三十六(方術部・符術)「又(淮南萬畢術)曰、梧木成雲。(取梧木、置十碩瓦甕中。気尽則出雲。)

◇ 自然現象を操作する、或いはそれに似た状態を作りだす方。続

く二・三・四も同様である。実際に雲をおこしてどうするのかは不明。想定される雲の量から考えて、雨乞が目的とはみなし難い。

二

〔原文〕

岑皮致水。(『太平御覽』九百九十二。)

取岑皮置甕中、自沸如雨也。(『太平御覽』七百三十六。按此條、『御覽』引連屬赤布在戸條下、文義不類、今析出。)

〔書き下し〕

(文) 岑皮①は水を致す。

・『太平御覽』九百九十二。

(注) 岑皮を取りて甕中に置けば、自ずから沸くこと雨の如きなり。

・『太平御覽』七百三十六。按ずるに此の條は『御覽』は引きて「赤布在戸」の條の下に連ね属せしむるも、文義類せざれば、今析けて出す。

〔注〕

① 秦皮。モクセイ科のトネリコ(栲)の樹皮。

〔現代語訳〕

(文) 岑皮は水をもたらす。

(注) 岑皮をかめの中に入れておくと、自然と水が雨が降った時の

ようにたまってくる。

〔補〕

- 『太平御覽』九百九十二(薬部・秦皮)「淮南萬畢術曰、岑皮致水。」  
 ○ 『太平御覽』七百三十六(方術部・符術)「又(淮南萬畢術)曰、赤布在戸、婦人留連。(取婦人月事布、七月七日燒為灰、置楣上、即不復去。勿令婦人知取) 芥皮置甕中、自沸如雨也。」

◇ 「岑皮」は一名を「秦皮」とも言い、『神農本草經』巻中に見える。そこには「秦皮、味は苦、微寒。風寒、溼痺、洗洗、寒氣を主どる。熱・目中青翳白膜(緑内障)を除く。久しく服せば、頭白からず、身を軽くす。川谷に生ず」とあり、この記述から本文を眼病治療に関わるものとして解釈することも可能か。その場合、「水を致す」の水は涙と解釈できるが、注が対応しない。文と注が対応しているとすれば、一の「補」に記したように、葉本の配列から、本条も自然現象に関わるものとなる。

◇ 荇洋林本に「案ずるに『御覽』(九九二・薬部・秦皮)は『呉普本草』を引きて「芥皮は一名秦皮」と。『説文』は「桤」に作り、「青皮の木」と。『淮南子』傲真訓に「桤木は青翳を已やす(王引之の説に従って「色」を「已」に改めた)」と。高誘云ふ「桤木は苦歴の木なり(高誘注には「木」の下に「名」字がある)。山に生ず。其の皮を剥ぎ取り、水を以て之に浸せば正青たり。用て眼を洗へば、人の目中の膚翳を愈やす」と。孫本の「岑」を「芥」字に作るは誤まりなり。」とある。

三

〔原文〕

銅甕雷鳴。(『太平御覽』七百五十八。又七百三十六同)

取沸湯著銅瓶甕中、塞堅密内之井中。則雷鳴聞數十里。(『太平御覽』七百五十八。又七百三十六引作、取沸湯置甕中。流(鮑本作沈。茲從明刻。)之井裏、則鳴數十里。)

〔書き下し〕

(文) 銅甕(①)雷鳴す。

・『太平御覽』七百五十八。又七百三十六も同じ。

(注) 沸湯を取りて銅の瓶甕の中に著け、塞ぐこと堅密にし、之を井中に内る。則ち雷鳴數十里に聞ゆ。

・『太平御覽』七百五十八。又七百三十六は引きて「沸湯を取りて甕中に置く。之を井裏に流せば(鮑本(②)は「沈」に作る。茲は明刻(③)に拠る。)則ち鳴ること數十里。」

〔注〕

- ① 銅製のかめ。
- ② 『太平御覽』のテキストの一つ。清・嘉慶十二年鮑崇城刊本のこと。他に南宋蜀刊本、日本安政二年活字印本(活字本)、嘉慶十四年張海鵬刊本(張本)などがある。ただし鮑本も「流」に作っており、葉德輝の注は誤り。
- ③ 明の時代に印刷された『太平御覽』のテキストをさす。詳細については不明。

〔現代語訳〕

(文) 銅製のかめが雷鳴をおこす。

(注) 沸騰したお湯を銅製のかめの中に入れ、しっかりと密封して井戸の中に入れると、雷鳴のような音がして、それは数十里離れた所まで届く。

〔補〕

○ 『太平御覧』七百五十八(器物部・甕)「淮南萬畢術曰、銅甕雷鳴。

(取沸湯著銅甕中、堅密塞、内之井中、則雷鳴聞數十里。)

○ 『太平御覧』七百三十六(方術部・符術)「又(淮南萬畢術)曰、銅甕雷鳴。(取沸湯置銅甕中、沈之井裏、則鳴數十里。)

取家祠黍、以啖

兒、兒不思母。」

◇ 孫翼本は『白帖』卷十三も「語少しく簡なり」として掲げる。

◇ 擬似雷鳴をおこしてどうするのか、何のために擬似雷鳴をおこすのかは不明。或いは擬似雷鳴によって虎などの猛獣を威嚇し遠ざけるといふことかもしれない。同様に虎を遠ざけるものとして葉本の三六「角を焼きて山に入れば、虎豹自ら遠ざく」、虎の接近を知らせるものとして葉本の七七「虎嘯けば則ち谷風生ず」などがある。また、広く破邪を目的とした可能性もある。

四

〔原文〕

方諸取水。『太平御覧』五十八。

方諸形若杯。无耳。以五石合治、以十二月壬子夜半作之以承、水即來。『太平御覧』五十八。按今『淮南鴻烈解』天文訓、「方諸見月、則津而爲水。」高誘注「方諸陰燧、大蛤也。熟摩令熱、月盛時、以向月下、則水生。以銅盤受之、下水數滴。先師說、然也。」『華嚴經音義』一、引許慎注云「方諸、五石之精、作圓器似杯迎月、則得水也。」『太平廣記』一百六十一、引許慎注云「方諸、五石之精、作圓器似杯圻而向月、則得水也。」『太平御覧』四・吳淑『事類賦』月部、引許注云「諸珠也、方石也。以銅盤受之、下水數升。」『華嚴音義』及『廣記』所引不同。

〔書き下し〕

(文) 方諸は水を取る。

・『太平御覧』五十八

(注) 方諸は形杯の若し。耳(①)なし。五石(②)を以て合して治り(③)、十二月壬子の夜半を以て之を作りて以て承くれば、水即ち来る。

・『太平御覧』五十八。按ずるに今の『淮南鴻烈解』天文訓に「方諸は月を見れば、則ち津つばして水を為す」と。高誘(④)注に「方諸は陰燧、大蛤なり。熟摩(⑤)して熱からしめ、月盛なる時、以て月に向ひて下せば、則ち水生ず。銅盤を以て之を受くれば、水数滴を下す。先師(⑥)の説、然り」と。『華嚴經音義』一、許慎(⑦)注を引きて云ふ「方諸は五石の精もて

圓器を作り杯に似す。月を迎へば、則ち水を得るなり」と。  
 『太平廣記』一百六十一、許慎注を引きて云ふ「方諸は五石の精、圓器を作りて杯圻(⑧)に似せて月を向へば、則ち水を得るなり」と。『太平御覽』四・吳淑『事類賦』月部、許注を引きて云ふ「諸は珠なり、方は石なり。銅盤を以て之を受くれば、水数升を下す」と。『華嚴音義』及び『廣記』の引きし所と同じからず。

〔注〕

- ① 杯の取っ手。
- ② 五種類の鉱石。丹砂・雄黄・白凡・曾青・慈石をさす。
- ③ 「治」は「治」に同じ。
- ④ 後漢。『淮南子』のほか、『戦国策』『呂氏春秋』などの注も残っている。
- ⑤ 十分にこすって、の意。
- ⑥ 盧植(後漢。字は子幹。一九二年没)をさす。高誘は『淮南鴻烈解序』においても、盧植を先師と称している。
- ⑦ 後漢。字は叔重。一九五年没。『淮南子』注のほか、『説文解字』『五經異義』などの著作がある。
- ⑧ 文意から「圻(こて)」は「圻(くぼむ、くぼみ)」の誤りであろうと推定される。「圻杯」でくぼみのある杯。

〔現代語訳〕

(文) 方諸は水を取る。

(注) 方諸は形が杯のようであり、耳のような取っ手はない。丹砂・雄黄・白凡・曾青・慈石の五石を合わせて鑄造する。十二月壬子の夜半にこれ作つて月に向け、その光を受けると、即座に水が溜まる。

〔補〕

- 『太平御覽』五十八(地部・水)「萬畢術曰、方諸取水。(方諸、形若杯。无耳。以五石合治。以十二月壬子夜半作之、以承。水即来。)」
- 『淮南子』天文訓「陽燄見日、則燃而為火、方諸見月、而則津而為水。」高誘注「陽燄金也。取金杯無縁者、熱摩令熱日中時、以当日下以艾承之、則燃得火。方諸陰燄、大蛤也。熱磨拭令熱、月盛時以向月下、則水生。以銅盤受之、下水数滴。」
- 『華嚴經音義』一(經卷第十三「菩薩問明品」)「如鑽燄。(鑽、則官切。燄、徐醉切。鑽謂木中取火、燄謂鏡中取火也。淮南子曰、陽燄見日、則燃而為火、方諸見月、而則津而為水。許叔重曰、陽燄、五石之銅精、仰日則得火。方諸、五石之精作圓器、似杯、仰月則得水也。燄又作鑿也。燄而善切。)」
- 『太平廣記』百六十一(感応一「五石精」)「論衡曰、陽燄取火、方諸取水。二物皆当以形勢得。陽燄若偃月、方諸若圻杯。若二器如板状。安能得水。鑄陽燄、用五月丙午日午時、鍊五色石為之。形如圓鏡。向日即得火。方諸、以十一月壬子夜半時、鍊五色石為之。状如圻杯。向月即得津水。今取大蚌蛤向月、亦有津潤。淮南子云、陽燄見日、燄而為火、方諸見月、津而為水。注云、皆五石之精、陽燄圓以仰日得火、方諸圻而向月得水。又云、陽燄之取火

於日、方諸之取露於月。天地之間、玄微忽恍。巧曆所不能推其數。然以掌握之中、引類於太極之上。而水火可立致者、陰陽相感動然也。」（出『感應経』）

『太平御覽』四（天部・月）所引許慎注「又（淮南子）方諸見月則津而為水（高誘注曰、方諸陰燧、大蛤也。手摩拭令熱、以向月則水生。許慎注曰、以銅盤受之、下水數升。）」

『事類賦』月部所引許慎注「捧陰燧而津流——淮南子曰、方諸見月則津而為水。高誘注曰、方諸陰燧、大蛤也。熟摩拭令熱、以向月則水生也。許慎注曰、諸珠也。方名也。以銅盤受之、下水數升。」

◇ 右の『太平廣記』が引く『論衡』は、現行本には見られない。陽燧に言及する類似した文は率性篇、乱龍篇、詰術篇、定賢篇などに見られる。

◇ 荊洋林本に「案ずるに『淮南』天文訓に「方諸は月を見れば、則ち津ひて水を為す」と。高誘注に云ふ「方諸は陰燧、大蛤なり。熟摩して熱からしめ、月盛なる時、以て月に向ひて下せば、則ち水生ず。銅盤を以て之を受くれば、水数皿を下す」と。又『御覽』は許慎注を引きて云ふ「諸は珠なり。方は石なり。銅盤を以て之を受くれば、水数升を下す」と。又『華嚴経音義』は許叔重を引きて曰く「方諸は五石の精もて圓器を作り杯に似す。月を迎へば則ち水を得るなり」と。『御覽』の引きし所の許注と同じからず。而して漢武本紀『素隱』の引きし高誘の『淮南』云云に注せしは、注する所は乃ち『萬畢』中の語なり。則ち高誘は是れ並びに『淮南萬畢』に注せし者にして、此の注と内篇に注せしとは異なるあり。且つ五石は許氏の説に似る。為に之を備録し、以て参攷を俟

つ」とある。

◇ 方諸で取った水を何に使用するのは記していないが、方諸を月にかざしていることから、承露盤と同質のものとみてよからう。月（太陰）は火のかたまりである日（太陽）に対して水のかたまりとされ、満ち欠けする様は再生・不死を象徴するものと考えられていた。ここから西王母にまつわる月における不老不死の仙薬の伝承を生じているし、漢の武帝が月から取った水を仙薬として飲んでいたという『史記』封禪書の記述もある。薬剤でもある五石を方諸製作の材料としていること、水を取る日にちが十二月壬子に限定され呪術的要素をもっていることなども、その一証となろう。月の再生・不死という属性を、そのエキスを飲むことによつて得ようという類感呪術の一つであろう。